



TITLE:

<批評・紹介> 水野清一著 「東亞考古學の發達」

AUTHOR(S):

日比野, 丈夫

CITATION:

日比野, 丈夫. <批評・紹介> 水野清一著 「東亞考古學の發達」. 東洋史研究 1949, 10(5): 412-412

ISSUE DATE:

1949-05-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/138892>

RIGHT:

東亞考古學の發達

水野 清 一 著

昭和二十三年六月十五日 大八洲出版刊
B 6 判 二四六頁 圖版六 價一〇〇圓

古文化叢刊の第七冊。著者によれば、東亞考古學の領域を中國プロバと滿洲、朝鮮とわが國とに限定されてゐる。アジアの考古學の分野はこのほか西域考古學、南海考古學とさらに北方ユーラシア考古學に分けられるといふ。本書に取扱

はれる範圍はいふまでもなく、わが國を除いた中國を中心とする地域における、前世紀末葉以來、今日に至るまで五十餘年間の考古學界の發達概観である。これを邦人の調査、歐米人の調査、中國人の調査に分類して、それぞれ年代順に設き、終りに若干特殊な地域的發達、特殊な學者の業績をとり上げてゐる。

考古學研究の對象は古代の遺物、遺蹟にあるが、遺蹟から遊離した遺物の學的價值に乏しいことはいふまでもなく、考古學の中心は遺蹟の調査研究になければならぬといふ。同感である。しかし考古學そのものがまだ新しい學問であり、いはんや東亞考古學はこれから發達すべき開拓途上の學問である。研究の範圍は先史時代の遺蹟から、近代の工藝建築に至るまで餘りに多岐多端である。これを一概に考古學の中に入れてしまふことは煞張りすぎではあるまいか。しかし、いづれは近いうちに整理されるときがくるであらう。

ともかく著者は昭和初年以來、東亞各地の考古學的發掘調査には殆んど關係しなかつたことはなく、その結果をぞくぞく立派な報告書として世に送り、今日の地位を築いてこれれた私の尊敬する先輩の一人である。この人によつてかうした書物の作られたことはまことにその人を得たものといへよう。單なるビブリオグラフィによつて編纂されたものと違つて、その中に血が通つてゐる。それに何といつても文献も逐一擧げられてゐて便利である。考古學に限らず、東亞に関心を有する學者は必ず座右に一本を備へて、その恩恵に與かれんことをおすすめして紹介にかへる。

〔日比野丈夫〕